

「認知症世界の歩き方」：笥 祐介（かけい ゆうすけ） 足元が蜃気楼のように揺れたり、突然行く手を阻んだりする砂漠の迷宮【サッカク砂漠】

－認知症のある人の頭の中をのぞいてみたら？－

《この砂漠は、歩を進めれば進めるほど、想定外の景色に出くわします。吸い込まれそうな真っ暗で深い谷や、灼熱の荒野に浮かぶ大きな水溜まり。川が流れるはずも、雨が降ることないこの土地に、なぜ？・・・

ここを旅するだれもが、次に何が起こるのかわからない恐怖で身体が固まり、立ちすくんでしまうのです。》

駅や商業施設の中を歩いていると、たまに「地面がデコボコしているのかな？」と思うような、幾何学模様のタイルが張られた床にであることがありませんか？

このように、目や耳に異常がないのににもかかわらず、実際とは異なる見え方、聞こえ方をしてしまう現象のことを「錯覚」と呼びます。目の前に存在している世界と、人が知覚する世界はそもそも同じではないのです。

◆ 日常がトリックアート化していく

- ① 『最近、見ているものの大きさがよくわからなくなるという出来事がありました。電車に乗っていた時のことです。目的地に着いたので降りようとしたら、電車とホームの間がものすごく広く感じ、まるで深い深い谷底まで続いているかのような、大きな隙間があったのです。それなのに周りの人はみな、そこに隙間なんてないように、すいすい降りていきます。』
- ② 『後から考えれば、あの深い谷のように見えた暗闇は、ただの電車とホームの隙間だったのですが・・・。今までは、そんな隙間、ちょっと気を付ければ降りられたのに。なんだかその日は、とても大きな隙間に感じたのです。』

◆ 電車とホームのわずかな隙間が深い谷のように見えた理由

- ① 人は、目から入ってくる二次元の見え方から、モノの大きさや影の落ち方、モノの動きといった、距離や深さに関係する情報を読み取っています。そして、その情報をもとに、脳の中で三次元の世界をつくりあげ、それが何かを認知しています。
たとえば、「自分の位置から大きく見える→だからこれは近くにある。」「自分の位置から小さく見える→だからあれは遠くにある」というように。
- ② 「電車とホームの隙間が深い谷のように見えた」のは、目から入ってきた二次元情報を、脳が三次元情報に変換するところに何らかのトラブルをかかえているためと考えられます。
⇒ 目に前にある実際の距離や深さを正しく認識ことが困難になっているため、とてつもなく大きな隙間に見えてしまっているのでしょう。

◆ 「商店街でのできごと」と「ホテルでのできごと」

- ① 商店街を歩くたびに歩道の地面がぐねぐねと動くのです。立ち止まってよくよく足元を見ると、ただ白と黒のタイルが交互に並んでいるだけでした。
- ② ホテルの内装が壁も扉も家具も白っぽいもので揃えられていて、何処までが床で、何処に壁があるのか分からなくなって何度も壁にぶつかりそうになりました。便器も白でもうどこに座ればいいのかさえ分かりません。やっとの思いでドアの前に着いたら、こんどは足元に大きな落とし穴が・・・！それは玄関マットでした。

◆ 玄関マットが落とし穴に見える理由（人が何か行動するときのプロセス）

- ① 目や手などで外界の情報を「知覚」して
 - ② その情報が何であるかを認知し、過去の記憶や知識・経験に基づいて「判断」して
 - ③ 判断に従って「行動」する
- この「知覚」「判断」「行動」というプロセスを何度も繰り返すことによって、脳に経験・知識が蓄積されます。このプロセス①と②の片方、もしくは両方にトラブルが起こることによって、日常生活に様々な困りごとが起きると考えられます。
- 本件の理由は、目からの情報を知覚する過程で、玄関マットが穴に見えるという、プロセス①の知覚情報の処理トラブルが起こっています。目から入ってきた二次元情報をうまく三次元情報に変換できず、穴に見えてしまっているわけです。
- 「知覚」（プロセス①）の段階でトラブルが起こっても、「判断」（プロセス②）の段階でその情報を確かめれば、特に問題はありません。多くの人は一瞬穴のように見えても、「玄関マットに穴があるはずがない」というように、これまでの知識・経験などをもとに判断できます。
- しかし、認知症のある方は、頼りにすべきその知識・経験などの知識が曖昧になっているために、どうしても穴に見えてしまうのだと考えられています。

次回は連載その7「入浴するたびに温度や・肌触りが変わる不思議な湯が沸き出る【七変化温泉】」